

「女性」という言葉

—言葉が創る政治文化—

京 極 興 一

はじめに

近年、公的な機関や活動の名称の中の用語「婦人」を、「女性」に改める動きが顕著である。例えば、長野県について見ると、一九九二年度に、県の「青少年家庭課婦人室」「婦人就業サービスセンター」「婦人総合センター」の「婦人」が「女性」になり、一九九三年度に、長野市・中野市・佐久市に続き、上田市「厚生課婦人係」、須坂市「社会教育課婦人係」、更埴市「福祉事務所婦人係」の「婦人係」が「女性係」となった。更に、一九九四年度には、総理府が「世界婦人会議」を「世界女性会議」と改称した。その後、このような動きは、全国的に急速に波及している。今後は、労働省の「婦人局」、文部省生涯学習局の「婦人教育課」の改称をはじめ、刑法における「婦女」、労働基準法の「女子」等の用語の検討も課題となろう。

ところで、これらの「婦人」から「女性」への改称は、何に起因するのであろうか。一般にその理由に

挙げられるのは、成人または既婚者を指す「婦人」に比して、より広く若年層をも含む「女性」の方が便宜であるという意味的な面、また、上品ではあるが古い感じの「婦人」、一般的ではあるが卑俗な感じを伴う「女」に比して、より新しく、より改まった感じの「女性」をよしとする語感的な面である。しかし、それにもまして、この現象の根底には、「女性」が「男性」と対応した男女対等の用語であるとの認識、更に、それを行政機関等の名称、いわば公的言語の中に位置付けようとする意識が強く働いていると考えられる。即ち、この語の使用は、近年の女性の社会的地位の変動がもたらした男女平等・同権の政治思想、政治文化との深いかわりのもとに生じ、また、その思想、文化の創造と推進を目標としていると見るべきであろう。

しかしながら、「女性」と政治思想、政治文化とのこのようなかわりは、最近に始まったことでなく、すでに明治前期から明治中期における「女性」の誕生と定着の過程に認められるものである。以下、その概況を明らかにするとともに、特に、福沢諭吉と巖本善治の「女性」の使用とその意識について考察することとしたい。なお、本稿では、明治前期と中期の境界を、明治十八年から二十年ごろとしておく。

一 「女性」の誕生と定着——明治前期から中期へ——

明治前期において、男女平等論・同権論の多くは、『明六雑誌』（明治七年三月から八年十一月まで発行）に発表された。筆者は、森有礼・福沢諭吉・津田真道・加藤弘之・中村正直等で、いずれも当時の代表的な啓蒙家である。

ところで、これらの論説の中の用語には、主として「婦人」あるいは「女子」が使用されている。日常用語であるが卑俗さを伴う「女」を避け、改まった丁寧な語感を持つ「婦人」を使用しているのは、論説の固いスタイルにふさわしい用語というばかりでなく、筆者たちの男女同権意識の反映とも見られよう。

さて、一方で、この時期には、「女性」という用語が使用されることになった。そこには、右のような「婦人」の使用意識と共通するものがあつたと考えられる。なお、次の例において、(1)は「女全体」、(2)は「女の本性・氣質」の意味に用いられている。

- (1) ^{あひあ}亜細亜人ハ痛ク女性ヲ屈シ民法上ニ於テモ男女同權ト云フコト無シ（津田真道「夫婦同權辨」明治八年五月「明六雜誌」第三五号）

- (2) 同權ヲ主張スルハ女性ニ戾ルト云テ（深間内 基訳『男女同權論』明治十一年）

しかし、この時期に、使用例は極めて少数であり、多く用いられるのは、明治前期末から中期にかけてである。例えば、そのころの代表的作家坪内逍遙と二葉亭四迷の作品、及び国語辞書『言海』には、次のような例が見られる。この中で、『言海』に収録されていることは、使用が一般化した状況を端的に示すものとして、特に注目される。

主人公に男女の別あり男性なる者を男本尊といひ女性なる者を女本尊といふ（坪内逍遙『小説神髓』下巻 明治十九年）

何処ともなく落着て優しく女性らしく成つたやうに見えた（二葉亭四迷『浮雲』第一編第二回 明治二十年）

ぢよせい 女性 女ニ生レツキタルコト（大槻文彦『言海』明治二十四年）

なお、この時期の「女性」の振り仮名には、大別して「によしよう」「じよせい」の二種があるが、本稿では、次の点を指摘するにとどめておく。

- ・ 「によしよう」は古くからの読み方、「じよせい」は明治期に新たに生じた読み方である。
- ・ この二種の語は、基本的な意味・用法において同じである。
- ・ 語感的には、今日と同様、「によしよう」が雅語的な上品なイメージ、「じよせい」が文書語的な固さとともに新鮮なイメージであつたと思われる。
- ・ 「によしよう」が衰退し、「じよせい」が一般化する傾向は、明治二十年代の前半に生じた。

二 福沢諭吉の「婦人」と「女性」

前節に述べたように、「女性」使用は明治中期に入つて多くなるが、その代表的なものとして、福沢諭吉の『日本婦人論』と、巖本善治執筆の『女学雑誌』の社説を挙げることができる。以下、この二つについて考察する。

福沢諭吉は、次に見られるような男女平等の思想に基づいて、女性についての多くの論説を発表した。

男といひ女といひ、等しく天地間の一人にて軽重の別あるべき理なし（「中津留別の書」明治三年）

今日から見ると、その女性論の中には、批判さるべき点もあるが、当時としては質量ともに優れた啓蒙

的活動として、高く評価される。

その福沢は、女性論をなすに当って、どのような用語を用いたのであろうか。『学問のすゝめ』（明治五年～九年）と『日本婦人論』（明治十八年）について、用語と用例数を示すと、次の通りである。

	学問のすゝめ	日本婦人論
女性	〇	四二
婦人	一三	三七
女	七	二
女子	五	六〇

『学問のすゝめ』においては、「女性」を用いず、「婦人」を主たる用語として一三例用いているが、この語には、次の例のように「男子」に対等の用語という使用意識があつたものと思われる。

今の人事に於て男子は外を務め婦人は内を治るとて其關係殆ど天然なるが如くなれども（第十五編 明治九年）

なお、「女」は、「一人前の男は男、一人前の女は女にて」（初編）のように、「男」と対になる語として用いられたものである。

次に、『日本婦人論』においては、「女性」の使用が四二例で、「婦人」三七例を上回っている。前述した

ように、一般に、「女性」の使用は、既に明治十年前後に見られるが、極めて少数にとどまった。そのような状況の中で、明治十八年刊の『日本婦人論』に非常に多く用いられていることは注目値する。

しかも、この「女性」は、次に示すように、女権に直接、間接に関連する語を修飾することが多い。これは、「婦人」の使用には見られない特徴であり、この著書の「女性」が、男女同権論の用語として意識されていることを示すものである。

（「女性」の）精神・知識・情感・情・快樂・春情・心身・發達・活潑・自由・分限・權利・婚姻の權利・模範・運命・進退・有様・地位・慘狀・鎖

なお、『日本婦人論』では、次の例に見るような「女生」表記がほとんどであり、「女性」は少ない。また、少数であるが、「男生」（男性）の使用も見られる。これは興味ある問題であるが、ここには取り上げない。

畢竟するに我輩の志願は男生に向て多を求るにも非ず、女生の為に特に利せんとするにも非ず、唯雙方平等ならんことを期するのみ（八）

さて、福沢諭吉が「女性」を使用したのは、『日本婦人論』の中だけであった。この書に引き続いて刊行された『日本婦人論 後編』（明治十八年八月）は、「女性」をまったく用いず、ほとんどが「婦人」である。その原因としては、前者が知識人を対象としたものであるのに対して、後者が平易さを旨としたために、非日常的用語の「女性」を意図的に避けた点があるかとも思われるが、判然としない。また、その後刊行された『女大学評論・新女大学』（明治三十二年）の場合にも、「女子」「婦人」を主とし、「女性」

の使用は極めて少数である。この理由も明らかでない。

要するに、福沢諭吉の場合は、政治思想とのかかわりのもとに「婦人」「女性」を使用していること、『日本婦人論』の「女性」の多用に先駆的な意義が認められることの二点を指摘することができよう。

三 巖本善治の「女性」

巖本善治編集の『女学雑誌』は、旧来の封建的女性観に対して男女平等思想に基づく啓蒙運動を目的として、明治十八年七月に創刊され、約二十年間にわたり発行された。女性問題を主題とした最初の雑誌である。以下に取り上げる社説は、巖本善治が執筆したものである。

先ず、社説「女学の解」(第一一一号 明治二十一年五月)から抄出した使用例を取り上げる。

(1) 女学は、即ち、「婦女子」に関する「一科の学問」と云へること也(中略)凡そ女性に關係する凡百の道理を研窮する所の学問なり。

(2) 多くは是れ、目に男性を見て、心に女性を忘る、即ち(中略)男子あるを知つて、佳人の玉姿あるを見ず。

(3) 政治家は、弥よ男性に慮かりて、政治の権略、多く男子の一方に僻しぬ、此を以て、女性は大に忘れられて、(中略)弥よ大に棄てられんとす。

(4) 女学雑誌よ、汝は読者を笑はさずともよろし、読者のお慰みに為らずとも宜し、婦人方にネンネコ

歌を歌はざるとも宜し。

「婦女子」は、(1)の「女学」の定義中に用いられているが、直後に「女性」に言い換えられ、「婦人」は、(4)の揶揄的表現の中の一例が使用されるだけである。それに対して、「女性」は、(2)(3)の例のように、「男性」「男子」に対応する用語であり、同権者としての女性の地位を明確に示す用語である。また、それは、「女学の解」の中の一四例の「女性」に共通したものである。

次に、『女学雑誌』第一四八号から第一五九号まで（明治二十二年二月九日～四月二十七日）に掲げられた巻頭言を見てみよう。

女学雑誌は日本の女性を代表す、日本の女性^は女学雑誌の如くなり、亦如くなるべし、亦如くならざる可^べからず。日本の女性^を知らんと欲せば女学雑誌を見よ、之に愛せられんと欲せば女学雑誌に愛せられよ。女学雑誌は日本婦人の分身にして、亦た其の教師、案内者、相談相手なるなり。

この巻頭言の中には、「日本婦人」も一例あるが、「日本の女性」は三例が積みかけるように使用されている。この時期の『女学雑誌』における「女性」という用語の重みを感じさせるものがある。

このようにして、巖本善治の「女性」の使用には特別の意味が籠められていたといえようが、それはどのような過程を経て形成されたものであろうか。

次の表は、明治十八年七月の創刊号から明治二十四年末の第二九七号までの社説について、「女性」とその関連語「婦人」「婦女」「婦女子」「女流」「女子」の使用数を年次順に示したものである。

	十八年	十九年	二十年	二十一年	二十二年	二十三年	二十四年
女性	〇	〇	三二	一七八	二四三	六五	二九
婦人	五九	一四三	一六〇	一二九	七一	四五	一六
婦女	七八	九	七	五	一	〇	七
婦女子	〇	二	三二	三八	六二	一一	一六
女流	三	三七	一〇二	一八	五〇	〇	〇
女子	〇	一一三	一六三	二五五	二二二	一六二	一一九

注1 「女子」は、「女子教育」のように複合語として多く用いられるので、他の用語とはやや異質の面がある。ここには、参考資料として挙げておく。

注2 明治二十三年と二十四年に、全体としての使用数が減少するのは、この時期に女性論関係の社説が少なかったことによる。

右の表から、注目すべき点を挙げると次の通りである。

一 総じて、明治十八年の創刊以降七年間の社説の主たる用語は、十八年の「婦女」「婦人」から、十九年・二十年の「婦人」「女流」へ、更に二十一年以降の「女性」「婦人」への変遷が見られる。

二 「女性」と「婦人」について見ると、明治二十年まで「婦人」が優勢であったが、二十一年から「女

性」が優勢となり、その後四年間継続する。二十一年は、前掲の「女学の解」が発表された年であり、巖本善治の「女性」重視への転換である。

三 「婦女」は明治十八年に、「婦女子」は二十二年は、「女流」は二十年に多く用いられたが、これらは一時的な現象にとどまる。

このように見てくると、巖本善治においては、種々の用語の模索的段階を経て、主たる用語としての「女性」使用を確立するという過程をたどっている。「女性」の使用は、「女学」という言葉を創り、女性論を開拓した彼の活動の中で、重要な意義を持っていたといえるのではなからうか。

おわりに

以上に見てきたように、「女性」という用語は、明治二十年前後の「女性論」の分野、特に福沢諭吉の『日本婦人論』、巖本善治の『女学雑誌』の社説において多用され、その使用意識は、男女の平等論・同権論、及びそれに立脚する政治文化と深くかわるものであったと考えられる。

しかし、その後、長い間、「女性」の使用は、一般化するに至らなかった。それは、この用語の文章語的性格に起因する点もあったろうが、右の政治思想、政治文化の停滞によるところも大きいと思われる。ただ、その間にあつて、明治終末期に、次のような使用例の见られることが注目される。

元始、女性は実に太陽であつた。真正の人であつた。今、女性は月である。他に依つて生き、他の光

によつて輝く、病人のような蒼白い顔の月である（平塚らいてう『青鞥』発刊趣意書の冒頭 明治四十四年）

婦人運動の先覚者平塚らいてう起草のこの趣意書には、三八例の「女性」が用いられている（「男性」九例）。
「女性」という用語そのものが、女性の開放と「新しい女」の誕生を訴えている観がある。

永遠に女性なるもの、我らを引きて往かしむ（森鷗外訳『ファウスト』ヘゲーテ第二部第五幕末尾 大正二年）

これは、Das Ewig-Weibliche に対する鷗外の訳語であるが、「聖母マリアや、塵の世を離れて浄められたグレートヘンなどの女性によつて代表される神的な愛を意味する」（相良守峯訳『ファウスト』へ第二部註 岩波文庫）と説かれるように、単に女性の本性・氣質を表すものでなく、思想的、宗教的に昇華した内容を意味する。この語が、このような内容の訳出に用いられた点、また、後世の翻訳の中に定着した点において、歴史的な意義を認めることができる。

右の二つの使用例は、意味・性格こそ異なるが、「女性」語誌の上で、明治期の最後を飾る記念碑ともいえるのではなからうか。

付記 本稿の関連論文に、拙稿『女性』の語誌——明治初期から中期に至る——（『上田女子短期大学紀要』第十七号 一九九四年三月）がある。

